

経営コンサルタントのK氏には、志半ばで先立つた同僚のE君がいます。

若くして逝つてしまつたのが惜しまれるほど、このE君はなかなかの人物で、人の痛みや苦しみを鋭く感じ取るばかりか、さりげなく相手に手を差し延べていました。

ある時、このE君がK氏に「僕の一番の宝物は親友の君だ」と言つて、君とのエピソードを語ってくれたといひます。

E君の母親が、親しい人から勧められて早朝の勉強会へ通うようになり、息子にも「いい勉強の会だから、お前も来るように」と言い、E君も通うようになりました。毎朝熱心に通つて来るE君の姿を目にした周囲の方々から後押しされ、彼はいつしか若手のリーダーになつていきました。やる限りは誠心誠意やるうと、E君は周囲の仲間と共に勉強しようと思をかけ、少しづつその輪を広げていつたのです。

そんなある日のこと、小学・中学の九年間を共に学んだ親友の君に、電話で呼び出されたのです。そして「Eよ、お前この頃変なことをやっているらしいな。街でも噂になつているぞ」と親友は厳しい顔でE君を問い詰めたのです。

E君はその親友の誤解を解くために、自分が早朝学んでいる会の目的や趣旨を事細かに説明するのですが、なかなか親友は納得してくれません。そればかりか、E君に「お前は騙されているんだ、目を覚ませ！」と忠告までする始末です。

話が平行線で噛み合わず、だんだんその場の空気も重いものになつていきました。そんな時、ポツンと親友が発した一言が、E君の胸をえぐつたのです。



温かく厳しい友は 人生の幸福である

「さつきからEよ、お前は『素晴らしい勉強会なんだ』と繰り返して力説しているが、そんなにいいものならば、なぜ一番先に親友の俺に勧めないんだ？ 勧められないということ、裏暗いところがあるからだろう。」

E君は一瞬、頭を殴りつけられたようなショックを覚えました。いいものであれば、何をおいても一番の親友に伝えるべきであつたと、強い悔悟の念にかられたのです。

古くからの言葉に「益者三友、損者三友」というものがあります。

交際して益をもたらす友とは、直言の友（ことある度に素直に正直に物を言ってくれる）、誠実な友（まことの心の持ち主で、いい時も悪い時も変わらぬ心を注いでくれる）、博学な友（見聞、知識が広いだけではなく、物の道理もわかまえてい）という意味です。

対して、損をもたらす友とは、不正直な友（自分にプラスになると思えば積極的になるが、マイナスだと思えば言い訳や弁解を重ねる）、不誠実な友（いいときには擦り寄つてきて、悪いときにはいの一に離れ、裏に回つては悪口、陰口を並べたてる）、巧言の友（言葉は巧みだが誠実に欠け、人の心をもて遊ぶ）です。

私たちは益者の友を多く持ちたいものです。しかし、親友を持つには、まずはその親友にふさわしい自分にならなければなりません。厳しい時代であるだけに、一人ではなかなか生きられません、時に温かく、時に厳しく諭してくれる友を持つことは、人として限らない幸せです。

え・栗木 映